

CASE 4

「同じ思いの下、「心のつながり」と「継続」で復興を支援



神戸学院大学

学長 岡田豊基

Toyoki Okada

犠牲者に対する追悼とあの「試練の時」を風化させないために

——一九九五年の阪神・淡路大震災では、神戸学院大学も甚大な被害を受けました。復興までの軌跡と、震災体験をその後どのように生かされたのかお聞かせください。

岡田学長（以下、敬称略） 神戸学院大学は、阪神・淡路大震災の震源に最も近い大学で、学生二人と教員一人が亡くなりました。学生のご家族一八人も犠牲になりました。建物の全壊などは免れたものの、ライフラインが随所で損壊して壊滅状態になったほか、校舎や研究室・図書館などの被害も甚大でした。こうしたなかで、当時の学長や教職員は直ちに大学に集まり、地震発生から約三時間後の午前九時には学内に緊急対策本部を設置し、迅速な対応を講じていったと聞き及んでいます。

震災直後に予定されていた後期の定期試験を中止し、学位記授与式は延期しました。入学試験は、受験生の交通の便を考慮して、急ぎよ本学のほか京都と大阪の二カ所に試験会場を設けました。本学から東は交通網が寸断され、新幹線も一部不通のなか全国八会場の地方試験会場に教職員が出向いて入試を実施しました。

これらが、震災直後から年度末まで

神戸学院大学は阪神・淡路大震災で甚大な被害を受け、多くの教訓を得た。その経験を踏まえて、防災・社会貢献に関する教育プログラムを充実させ、東日本大震災では東北福祉大学、工学院大学との「TKK連携」に基づき、迅速かつ継続的な支援活動を展開している。岡田豊基学長に防災やボランティア、社会貢献に関する全学的な仕組み・取り組みと成果について伺った。

の主だった動きです。それ以降、ライブラインの整備や建物の耐震補強を行い、防災マニュアルなどをより実践的な内容に改訂し、防災訓練もそれまでに以上に熱心に取り組むようになりました。

一方、子午線が通る兵庫県明石市の天文学館には、日本の標準時を示す大時計があったのですが、震災によって針が止まってしまいました。それを譲り受け、有瀬キャンパスに移設すると共に記念碑を建て、犠牲者の追悼と、震災の記憶を風化させまいという大学としての決意を表明了。

他大学と連携し 震災の経験を生かした 教育プログラムを推進

——神戸学院大学は、阪神・淡路大震災の経験を生かし、防災関連のプロジェクトを複数展開させています。

岡田 私たちは、震災を体験した大学として「神戸発の情報を広く発信していこう」と、二〇〇六年に防災や社会貢献を研究対象としている教員を中心に、学部横断型の教育プロジェクトとして学際教育機構を開設し、その中に「防災・社会貢献ユニット」を立ち上げました。法学部、経済学部、経営学部、人文学部の二年以上の学生が参加し、学部の枠組みを超えた、防災・社会貢献に関する講義とボランティア活

を学内に設置し、即座に被災地の東北福祉大学と被災地への支援活動をスタートさせました。

被災規模の違いこそあれ、私たちが震災の痛みは十分に理解し、どん底の状況から復旧・復興してきた経験があります。震災直後の取り組みとしては、多大な被害を受けた東北福祉大学に代わって本学が同大学に在籍する学生の安否確認を行いました。

また、旅行などで関西に来ていて、帰宅できなくなった東北福祉大学の学生に対しては、本学が宿舎を提供し、被災地の安全が確認できるまでお世話をさせていただきました。その際は、学生情報センターにご協力いただきました。そのほかにも総合リハビリテーション学部社会リハビリテーション学部の教員や学生が募金活動を行ってくれました。

この間、「一日も早く現地に駆けつけたい」というボランティア志望の学生が数多くいましたが、当時は被災地の状況がはっきりとつかめない状態でしたので、教員が安全性を確認・確保したうえでボランティアに行ってもらおうよう「逆啓発」したほどでした。

大学として、実質的に支援活動を開始したのは四月半ばになってからです。ボランティアの学生が被災地を訪ねると、震災を経験した神戸から来てくれたということで、親しみを感



神戸学院大学は、震災を経験した大学として 人文・社会科学の分野から 防災、ボランティア、国際協力に関する教育を行い、 広く社会に貢献する活動を実施しています



動などの実践を行っています。

二〇〇八年には、神戸女子大学、神戸女子短期大学、兵庫医療大学、神戸学院大学の四大学が協力し合い、「ポニーアイ4大学による連携事業—安全・安心・健康のための総合プログラムを軸として—」を発足させました。

これはポニーアイランドにある四つの大学が、地の利を生かして地域社会に貢献するもので、その先進的な取り組みは文部科学省の平成二〇年（二〇〇八）度「戦略的連携支援事業」に採択されました。「教育」「研究」「学生支援」「社会貢献」「生涯学習」の各分野で、「ポニーアイ防災推進プロジェクト」「ポニーアイ健康推進プロジェクト」「共同プロジェクト」を立ち上げ、既に多くの成果を上げています。

二〇〇九年には、仙台の東北福祉大学、東京の工学院大学と共に、TKK3大学連携プロジェクト「防災・減災・ボランティアを中心とした社会貢献教育の展開」をスタートさせました。三大学の中で、東北福祉大学は福祉の分野からボランティア教育を中心とした減災教育に力を入れ、地域に根ざした教育活動を行っています。工学院大学は工学の分野から防災を捉えて、災害時の緊急対応訓練などの新たなシステムを開発し、地域と連携した教育活動を展開しています。そして本学は、人文・社会科学の分野から防災、ボラン

いただいたと聞いています。

学生たちは、被災された方々に対してどのようにすれば心を開いていただけるのか、コミュニケーションの取り方などを勉強しながら活動しました。そして、一日の仕事をやりに終えた後、皆さんから「ありがとう」と言われると、その一言で自分の行動が被災者の生活の手助けになっていることを実感できたようです。

——被災地での支援活動を通じて得られたもの、あるいはその経験を次につなげるための方策について、どのような考えでしょうか。

岡田 震災を経験した大学として、親身になって被災地の方々を応援させていただいたつもりですが、その一方で、大学生が実践できる支援の難しさにも直面しました。支援活動は継続して行わなければ、被災者との絆を深めていくことができません。一方、学生たちには神戸での生活があり、頻りに被災地へ行くわけではない。そこで支援に一貫性を持たせられるように、学生自らが考え、様々な工夫をするようになりしました。

例えば、先に現地で支援活動に当たった学生は、次に行くグループのメンバーに必ず被災地の状況と自分たちが行った支援内容を伝え連続性を持たせるように心掛けたそうです。また、次のメンバーと共にこれからどんな仕事

ティア、国際協力に関する教育を行い、その教材を活用した地域貢献活動を実施しています。

TKK3大学連携プログラムは、三大学の特色、強みを生かしつつ連携することで、社会貢献(防災・減災、ボランティア)に関するより高度な教育・研究を行い、広く社会に貢献していくものです。こちらも、先のポニーアイ4大学連携事業に続き、平成二〇一年（二〇〇九）度文部科学省「大学教育充実のための戦略的連携支援プログラム」に採択されました。

被災者の立場を最優先した 継続性のある支援活動 を行う仕組みづくり

——TKK3大学連携プロジェクトは、東日本大震災が発生した際も地域の異なる大学間連携のため、相互のバックアップ体制が効果を発揮したと言われています。東日本大震災からの復旧・復興に向けて、どのような取り組みを推進されてきましたか。

岡田 二〇一一年三月には、TKK3大学で社会貢献学会を設置するための設立総会を開催し、万一の場合は三大学で支援し合い、絆を深めていこうと合意しました。その後、東日本大震災が発生したのです。そこで、震災の翌日の三月二日には、私を本部長とする「東日本大震災災害支援対策本部」

が必要とされているか、そのためにはどんな準備をしたらいかなどを考えながら、情報を共有するようにしたのです。

これによって支援活動に継続性が生まれ、被災地の方々が一層喜んでいただけるようになり、また同時に、学生にとっても大きな成長の機会となりました。

学内に根づいてきた ボランティア精神と 社会貢献活動

——防災・減災の面で、大学が共同体として地域社会に果たすべき役割についてはいかがでしょうか。

岡田 被災地への支援活動を通して、私は大学間連携の大切さを再認識しました。被災地から距離のある神戸学院大学と工学院大学は、TKK3大学連携に基づき、東北福祉大学とその周辺地域の方々を極めて機能的に支援させていただくことができました。これは教員間の日頃のつながりや人間関係が見事に結実した成果だと思っています。

「ポニーアイ4大学」による連携についても、近隣の大学同士だからこそできることが数多くあり、四大学間で単位互換や図書館の相互利用だけでなく、地域社会と四大学が連携し、地域の方々と共に総合防災訓練を継続的に

実施するまでになりました。

「学際教育機構」は、防災・社会貢献ユニットのほか、スポーツを通して地域振興に貢献できる人材を育成しようとして、二〇〇七年に「スポーツマネジメントユニット」も開設しました。

このような多面的な取り組みにより、防災や社会貢献、健康などの分野で他大学や地域住民の方々と共に活動する機会が増大し、学生の企画・運営能力も飛躍的に高まったように感じています。

最近では、学生たちが自主的に小学校や中学校を訪ね、防災に関する啓発活動や模擬授業などを開催しています。社会貢献活動もますます活発化し、二〇一一年一月に実施された神戸マラソンでは、ボランティアとしての専門教育を受けている本学の学生が「ボランティアを束ねるボランティア」として活躍してくれました。

——TKK3大学連携プロジェクトの今後の取り組みを教えてください。

岡田 防災・減災、社会貢献に資する人材の育成は、年々そのニーズが高まっており、大学に求められる役割も変化してきています。そうしたなかで、TKK3大学連携プロジェクトは一〇年先を見据え、これまで三大学が取り組んできた社会貢献に関する人材育成システムをさらに高度化することを目指しています。



PROFILE

岡田豊基(おかだ とよき)

1953年生まれ。77年大阪市立大学法学部卒業。84年神戸大学大学院法学研究科博士後期課程単位取得退学。同年鹿児島大学法文学部助教授、87年神戸学院大学法学部助教授を経て、2010年より現職。博士(法学)。

具体的には、三大学共同の専門教育課程での「学び合い」、三大学連携による活動「分かち合い」、三大学連携による災害時に備えた円滑な大学運営のための大学間バックアップシステムと学生主体の実践訓練「助け合い」を展開することで、学生の「学士力」のみならず、各大学の社会貢献活動の一層の充実と危機管理体制の向上や人材育成を図っていきます。それと共に、長期的には「社会貢献学」という新たな教育・研究分野を確立することも目標に掲げています。

これらを実現するために、東北福祉大学に「TKK3分かち合い連携センター」、工学院大学に「TKK助け合い連携センター」、神戸学院大学に「TKK学び合い連携センター」を設置し、三つのセンターの連携により被災地でのボランティア活動に当たる担い手を育成していきます。将来的には三大学連携による資格制度「社会貢献活動支援士」を創設し、他大学や地域住民、企業などにも参画いただくことも視野に入れていきます。

支援活動を通じた心のつながりは決して消え去ることはない

——東日本大震災の被災地では、現在も復興に関わる多くの課題を抱えています。大震災を経験した神戸に根ざす

大学として、メッセージをいただけますでしょうか。

岡田 東日本大震災で被災された方々の多くは、いまだ震災前の生活に戻れず、何かにつけて不安な日々を送っておられます。時がたつにつれてテレビや新聞などでも震災に関するニュースが少なくなり、自分たちは忘れ去られているのではないかと不安をお持ちになるかもしれません。私たちも、一七年前は同じようにマスクミの報道が目を追うことに小さく不安を感じました。しかし、心のつながりは決して消えるものではありません。

神戸学院大学はこれからも継続的な支援を展開していきます。私たちの場合もそうでしたが、必ず復興できると信じ、希望を持って日々を送っていただきたいと心より念じています。 **N**



岡田学長と学生情報センター西尾社長(右)